

さがみはら

ユニバーサルデザインでインクルーシブ＆ダイバーシティなまちづくり

東京書籍 小学校道徳6年（R6版）の相模原市採択教科書

給食をミキサーにかけて
ペースト食を作る

開隆堂出版 技術・家庭 家庭分野の相模原市採択教科書

著作権によりネット上での表示はできません。



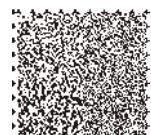
●いま、学びの現場で進むユニバーサルデザイン

ユニバーサルデザインの言葉を知ってる？ という問い合わせでいちばんに気づくのは世代間格差ではないでしょうか？

●取り残されそうな人を地域で支える

目と心の健康を考える～眼球使用困難症候群を知る

UD（ユニバーサルデザイン）とは、「みんなが暮らしやすくなるための工夫」のことです。





ユニバーサルデザインは、未来を生きる子どもたちの学び

これからの時代を見据えて教育観・学習観を変革し、個別の学習を担保しながら多様性を受け入れていく学びを。

相模原市教育委員会 教育局 学校教育部 教育センター研究・研修班 にお話を伺いました



小中学生のお子さんと関わりのある方は実感したことがあるかもしれません、実は「ユニバーサルデザイン(UD)」という言葉は子どもたちにとってはすでにとても身近な言葉になっています。というのも、UDは学校教育に多く取り入れられているから。低学年の頃から多様性に触れ、協働的に学ぶ中で現代の子どもたちはUDや心のバリアフリーの知識や体験を積み上げているのです。

著作権によりネット上で表示できません。

解説する
開拓堂出版「技術と
バーサルデザイン・家庭
紙」を

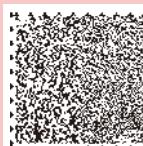
株新興出版社啓林館
「いきいきせいかつ下」
令和6年版の裏表紙の記述▶



前号でお伝えした
ともいき広場

さがみはらにできるインクルーシブ公園

【UD さがみはら 4号】でお伝えした県立相模原公園に来春開設されるだれもが一緒に遊べるインクルーシブ公園の「ともいき広場」。「ともに生きる社会かながわ憲章」策定の契機となった津久井やまゆり園と同じ相模原市内にあることから、ともに生きる社会の象徴的な場として「とも」に「いき」るから「ともいき」広場と名付けた広場。神奈川県はその整備のためのクラウドファンディングを始めました。9月27日に開かれた南区地域福祉交流ラウンジのふくしまりでは、「ともいき広場」開設告知に多くの子どもたちが関心を寄せ、親子で「遊びに行こうね」と話し合っている姿もほほえましかったです。その「ともいき広場」建設にあなたも参加できます。ふるさとチョイスのHPをチェックしてください。
<https://www.furusato-tax.jp/gcf/4764>



親子
連れ
見
いき
広場



UD

そんな子どもたちの学びの手助けの中心を担っているのが学校の先生。では、先生たちがどのようにそれらの知識を得ているのか、教育センターの職員さんに聞いてみると、相模原市では教職員を対象とした充実した研修が行われていることがわかりました。

相模原市で新規採用された教員が受ける初任者研修では、まず人権に関することや、通常の学級にもいる「団り感を持つ児童生徒」についての研修を受けます。それ以外にも支援教育に関する研修が用意されており、希望者や校務分掌での担当の先生が受講し、各学校へ持ち帰り校内での教育実践に活かしているそうです。

学校内にあるUD視点の配慮の例を教えてもらいました。

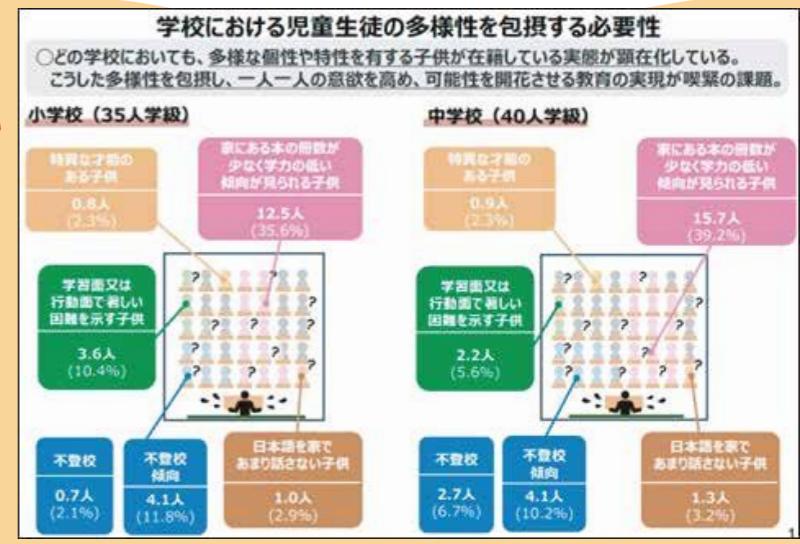
- ・黒板周りの掲示物を少なくする
- ・ロッカー内の物の置き場所を写真で可視化
- ・授業で使うワークシートは「マス目あり」「マス目なし」など数種類を用意

このような環境を整備することで落ち着いて授業を受けられる児童生徒が増え、クラス全体の雰囲気作りにも役立つことになります。

低学年では「生活」で自分を取り巻くさまざまな人

たちについて知り、中学年では「総合的な学習の時間」や「社会」でバリアフリーや福祉について学び、高学年では「国語」でまちで見つけたUDについてのレポートを作成し発表する。全学年を通じて「特別の教科 道徳」でも多様な人々の存在について考え、話し合う。このようにそれぞれの学年に応じた内容で各教科等でUDを知り、学ぶ機会が取り入れられています。

多様な子どもたちが同じ教室にいる中で、一人ひとりの学習進度や興味に応じて学習を最適化していく「個別最適な学び」と、子どもたちが他者と関わりながら課題を解決していく「協働的な学び」の一体的な充実が求められている現代の学校教育。予測不能で加速度的に変化する時代を生きていく子どもたちの学びのために、先生たちも日々知識や認識をアップデートしています。相模原市で採択されている教科書は図書館や総合学習センター内の図書室で貸し出し、閲覧することができます。(総合学習センターは閲覧のみ)教科書を見てみると子どもたちがどのような流れでUDを身近なものに感じるようになっているのかもわかるかもしれません。



© 2023 先生たちのウェルビーイングを目指して~教育政策と学校現場~ .より転載



著作権によりネット上で表示できません。

令和7年度相模原市採択道徳教科書の表題はコレ!

- 1年 えがおも、ことばだよ。
- 2年 こころの手を、つなごう。
- 3年 気もちがわかると、気もちがかわる。
- 4年 ちがうって、おもしろい。
- 5年 自分をもっと、ぼうけんしよう。
- 6年 どんな自分も、ほんとうの自分。

平成30年(2018年)から小学校で教科となった「特別の教科 道徳」。地域、学校、教師間で道徳教育の理解や指導方法に違いが生じやすいことが問題とされてきましたが、相模原市の道徳のために採択されている教科書は東京書籍のもので、それぞれ副題が大きく表紙に掲げられています。それを小学校の1年生から6年生まで並べみると、心のUDへの学びに満ちている“詩”的な表現が随處に見受けられます。

ひとりでも多くみんなと一緒に学校で給食を楽しむために

相模原市 教育局 教育環境部 学校給食課 にお話を伺いました



相模原市立の小学校では学校の給食室で給食を作る自校方式と給食センターで給食を作るセンター方式による給食が実施されていて、毎日おいしい給食が子どもたちのお腹と心を満たしています。しかし、学校には噛むことや飲み込む力が弱い摂食嚥下障害の子どもや、胃ろうから食べ物を直接胃に入れる子どももいます。そんな子どもたちがみんなと同じものを食べられるよう

どのような対応をしているのか、相模原市学校給食課の職員さんにお話を伺いました。

噛むことや飲み込むことが難しくても、食材や調理済みの料理をミキサーにかけたペースト食なら食べられる方もいます。現在、相模原市の公立小学校では8名の児童がペースト食の給食の提供を受けているそうです。保護者からペースト食の要望があると、学校・教育委員会、医師が連携し、提供

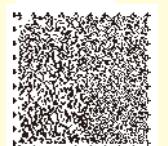
に向かって検討を行います。医師の判断や指示書・意見書とともに児童が食べられる食事の形状、環境整備の状況等を踏まえて、ペースト食対応が可能かどうかを学校が判断します。

ペースト食にするからと言って、みんなと違う特別なメニューにするというわけではなく、提供されるのは「みんなと同じもの」。理念の根底にあるのは「みんなと同じものを食べてもらいたい」という思い。そして、「栄養豊富で安全な給食を食べて成長してもらいたい」という願いも込められています。ご飯はご飯、主菜は主菜、と料理ごとにミキサーにかけられた給食はミキサーにかける前と同じように盛り付けられます。食事は五感をフルに使うもの。見た目も大事です。胃ろうからの食事でも匂いや味を感じるそうなので、料理ごとに味わってもらうことができます。

相模原市は今年3月に「給食室におけるペースト食作成に関するガイドライン」を策定。そこにはペースト食提供の目的に①児童の自立の促進、②保護者の負担軽減と記されています。この目的を果たすためにはペースト食の提供は第一段階。嚥下食には初期・中期・後期・完了期があり、離乳食のように子どもの発達段階に合わせて形態を変化させていく必要があります。しかし、現時点では相模原市立小学校で提供で

きるのはペースト食のみ。給食調理場の環境や人員等の理由もあり、柔らかく煮ることや、細かく刻むことはできないそうです。そのため、ペースト食を卒業できる段階になるとお弁当持参に切り替えなければならなくなる可能性もあります。さらに、現在実施されている中学校のデリバリー給食はペースト食対応をしていないため、保護者が学校へ行き、給食をペースト食にしている家庭もあります。(2026年1月以降、順次、開始する新たなセンターの給食では提供可能になる予定)

「どの子にも平等に給食を食べさせてやりたい」これは相模原市で最初に給食を始めた淵野辺小学校の当時の校長の言葉です。アレルギー、宗教食対応、会食恐怖、偏食……保護者からはさまざまな要望や相談が出されていることでしょう。給食提供に関わる方々はそれらの要望・相談を「どうにかできないか」「できることはいか」と日々努力と検討を重ねてくれています。「1人でも多くの子どもがみんなと一緒に給食を楽しめるようになりたい」というユニバーサルデザインに通じる理念を学校給食課の皆さんから感じることができました。



シンポジウム 参加レポート

■11月3日、ユニコムプラザさがみはらで開催されたシンポジウム「取り残されそうな人を地域で支える～眼球使用困難症候群を一例に～」

難症候群を一例に～」では、光の刺激が社会参加を阻む要因となる現状が浮き彫りにされた。眼球使用困難症候群とは、眼自体に異常がないにもかかわらず、例えば強いまぶしさのために目を開けられず、視機能を使えない状態になるなどの症状で、頭痛や身体の痛み、吐き気、めまいといった全身症状を伴うことが多い。原因は脳の誤作動や神経系機能の不全などが考えられているが治療法が確立していないうえに、視覚障がい者の対象から外れるため、支援を得られない「取り残されそうな人」になりやすい。

■当日の会場では、カーテンを閉め、窓側から遠い一部の蛍光灯を消灯して、明るさに弱い参加者のための席を確保するなど、光のユニバーサルデザインが実践された。講演では、光源視への人類の生物学的適応は十分とは言えないとの指摘もあり、強い光に満ちた社会環境そのものが、症状を抱える人々の外出や通院、リハビリを困難にしている現状が語られた。過剰な光が今後、同様の困難を抱える人を増やす可能性も示唆され、環境調整の知識やノウハウがまだ十分に共有されていないことが課題として挙げられた。ユニバーサルデザインの7原則には「安全であること」「身体への負担が少ないとこと」が含まれる。光や明るさの調整は、まさにこの理念を体現する取り組みである。

■シンポジウムの最後に、主催者は企画段階で当事者から寄せられた「取り残されそうな人“を”地域で支える」ではなく、「取り残されそうな人“と”地域を支える」という言葉を紹介した。支えられる側ではなく、ともに地域をつくる一員でありたいという思いは、UDが目指すインクルーシブな社会そのものを示している。光をめぐる課題を通して、誰もが共に生きる地域のあり方を改めて考える契機となるシンポジウムであった。



2025年

11月3日(月・祝)

日時

14時～16時30分(開場13時30分)

当日参加できない方で、後日報告書の送付を希望される方は、報告者希望としてお申し込みください。

ユニコムプラザさがみはらセミナールーム2

小田急線相模大野駅から徒歩5分(地図掲載)

会場100人、オンライン100人以上と
みんなの関心の高さを感じました。

例えば…

わずかな光を見ただけで激しい頭痛に襲われるから、目を開けられない。

なのに…

法的に視覚障害者としての基準を満たさないから、公的支援を受けられない。

さらに…

誰もこの病気を知らないから、周りの人が理解してくれない。そんな人がこの地域にも住んでいる。

ならば…

制度のはざまで苦しむ人をどうすれば支えていけるのか、みんなで考えていただきたい。

知っておきたい！

おたすけアプリ ナビレンス

主に視覚障がい者ユーザーの移動支援を目的としたスマートフォン用無料アプリ



アプリダウンロード用
QRコード

間の2階通路に貼付設置しました。

ナビレンスはスペインで生まれ主に欧米で使われています。ニューヨークの地下鉄駅で使われているほか大阪万博では道案内表示として活用されました。現在、区庁舎建て替え中の世田谷区では導入検討のための実証実験が行われています。

フォーカス不要、長距離から読み取れるコードをアプリで読み取ることで、位置情報や周囲の環境情報などを音声とサウンドで教えてくれます。

相模原市社協南地域福祉交流ラウンジのふくしまつりを機に、このナビレンスを相模大野駅西側市営駐車場とボーノショッピングセンターの

この紙面からも
読み取ることができます

これが
ナビレンスコード



相模大野にできたナビレンス通り みなさんも 体験してみてください

UDさがみはら vol.5 ■ 2025年11月30日発行
相模原市地域包括ケア推進課・NPO法人ここずっと



〒252-0303 相模原市南区相模大野9-6-18
☎042-851-5646 FAX042-742-0447
<http://www.cocozutto.jp/>

UDさがみはらのバックナンバーの音声版が右記QRコードのYouTubeで聞くことができます。

みなさまからのご意見や情報提供を募ります。

投稿先⇒e-mail:udsagamihara@cocozutto.jp

